opusdei.org

# 2022年四旬節教皇 メッセージ

2022/02/28

(邦訳:カトリック中央評議会)

「たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、善を行いましょう」(ガラテヤ $6\cdot9-10a$ )

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

四旬節は、わたしたちが個人として も共同体としても新しくなり、死ん で復活されたイエス・キリストの過 越に導かれていくのにふさわしい時 です。2022年の四旬節の旅路を歩む にあたって、聖パウロのガラテヤの 信徒たちへの勧めについて考えてみ るとよいでしょう。「たゆまず善を 行いましょう。飽きずに励んでいれ ば、時が来て、実を刈り取ることに なります。ですから、今、時(カイ ロス)のある間に、すべての人に対 して、善を行いましょう」(ガラテ  $76 \cdot 9 - 10a$ 

## 1. 種蒔きと刈り取り

使徒はこの箇所で、イエスが好んで 用いられた種蒔(ま)きと刈り取りの たとえ(マタイ13章参照)を用いて います。聖パウロは $\kappa \alpha \iota \rho \circ c($ カ イロス)について、つまり収穫を考え てよい種を蒔くのに適した時につい て語ります。わたしたちにとって、 ふさわしい時とはいつのことなので しょうか。間違いなく、それは四旬 節です。ただ、四旬節がある意味象 徴している、地上での人生全体rもま たその時なのです。わたしたちの生 活では、貪欲と高慢が度を超しては びこっています。たくさん所有し て、蓄えて、消費したい欲望が支配 的で、福音書のたとえに出てくる、 豊作で得た作物を倉にたくさん貯め 込んであるから暮らしは安泰で上々 だと考えている、愚かな金持ちのよ うです(ルカ12・16-21参照)。四 旬節はわたしたちを回心へと、考え 方を改めることへと招きます。それ によって人生は、本来の真理と美し さを得るでしょう。所有するのでは

なく与えることが、蓄えるのではな くよい種を蒔いて分かち合うこと が、できるようになるのです。

主役の農夫は、神ご自身です。惜し みなく、「人類によい種を蒔き続け ておられる | (回勅『兄弟の皆さ ん』54)かたです。四旬節の間わた したちは、「生きており、力を発揮 する」(ヘブライ4・12)みことば を受け入れることで、神からのたま ものにこたえるよう招かれていま す。神のことばを熱心に聞くこと で、喜んでみことばを行う従順さ (ヤコブ1・21参照)が習熟し、わ たしたちの人生は実り多いものとな るのです。わたしたちがこのことに 喜びを覚えるなら、「神のために力 を合わせて働く者」(一コリント 3・9) になるよう、今という時をよ く用い(エフェソ5・16)、よい行 いを通してわたしたちもまた種を蒔 くよう、召される喜びはさらに大き なものとなります。よい種を蒔くよ

うにとのこの招きは、重荷としてではなく、恵みとして捉えられるべきです。この恵みによって、創造主はわたしたちに、実りをもたらすご自分の忍耐強さに積極的に結ばれてほしいと願っておられます。

それでは、刈り取りはどうでしょう か。種蒔きは、収穫を目指してのも のではないでしょうか。当然です。 種蒔きと収穫の強い結びつきは、聖 パウロその人によって繰り返し説か れています。パウロはこう断言しま す。「惜しんでわずかしか種を蒔か ない者は、刈り入れもわずかで、惜 しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも 豊かなのです| (ニコリント9・ 6)。けれども、どんな収穫のこと をいっているのでしょうか。よい種 蒔きによる初穂は、わたしたち自身 のうちに、わたしたちの日々のかか わりのうちにあり、ささやかなよい 行いのうちにもあります。神から見 れば、愛の行為は、どんなにささや

かでも、そしてどんな「惜しみない 努力」も、決して無になるものでは ありません(使徒的勧告『福音の事 で、279参照)。木はその実によっ て見分けられるように(マタイ7・ 16、20参照)、よい行いに満ちたん 生は光り輝き(マタイ5・14-16参 照)、キリストの香りを世にもたら します(ニコリント2・15参照)。 罪から解放されて神に仕えること で、すべての人の救いのための聖化 の実は熟すのです(ローマ6・22参 照)。

福音書の格言に「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」(ヨハネ4・37)とあるように、実際にわたしたちは、自分の蒔いた実りのほんのまでもしか見ることはできません。まで、わたしたちは神の忍耐強さをもあるようになります。「蒔かれた善の人に収穫されるプロセスに着手で

きるのは、真の高潔さです」(回勅 『兄弟の皆さん』196)。他の人の ためによい種を蒔くことは、個人の 利益だけを考える狭量な論理からわ たしたちを解放し、行動に無償性ゆ えの悠然とした大らかさを与えて れます。そうしてわたしたちは、神 のいつくしみ深い計画の、すばらし い展望に加わるのです。

神のことばは、わたしたちの視界を さらに広げ、高めてくれます。それ は、まさに真の収穫とは、終末の時 に、最後の日に、沈むことのない太 陽が輝く日に行われる収穫である と、わたしたちに告げるものです。 わたしたちの生活とわたしたちの行 動によって結実するのは、「永遠の いのちに至る実| (ヨハネ4・36) であり、わたしたちの「天の富」 (ルカ12・33、18・22参照)となる ものです。イエスご自身、地に落ち て死に、実を結ぶ種のたとえを用い て、ご自分の死と復活の神秘を表現

しておられます(ヨハネ12・24参 照)。そして聖パウロは、わたした ちのからだの復活について説くため に、再びこのたとえを取り上げま す。「蒔かれるときは朽ちるもので も、朽ちないものに復活し、蒔かれ るときは卑しいものでも、輝かしい ものに復活し、蒔かれるときには弱 いものでも、強いものに復活するの です。つまり自然のいのちのからだ が蒔かれて、霊のからだが復活する のです| (一コリント15・42-44)。この希望は、復活されたキリ ストが世にもたらしてくださる大い なる光です。「この世の生活でキリ ストに望みをかけているだけだとす れば、わたしたちはすべての人の中 でもっとも惨めな者です。しかし、 実際、キリストは死者の中から復活 し、眠りについた人たちの初穂とな りました| (一コリント15・19-20)。それは、「その死の姿にあや か り (ローマ6・5)、愛のうちに 主と固く結ばれた者が、永遠のいの

ちを受ける(ヨハネ5・29参照)ために、その復活にも結ばれるようになるためです。「そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く」(マタイ13・43)

#### 2.「たゆまず善を行いましょう」

キリストの復活は、永遠のいのちと いう「大いなる希望」によって地上 の希望を強め、すでに今現在に、救 いの萌芽をもたらしています(ベネ ディクト16世回勅『希望による救 い』3、7参照)。多くの夢が破れて つらい失望に沈むとき、迫り来る難 題を前に不安に襲われるとき、乏し い手立てで失意に暮れるとき、そこ で頭をもたげる誘惑は、個人主義的 な己のエゴイズムに閉じこもろう、 他者の苦しみに無関心を決め込もう というものです。実際のところ、最 善の方策にも限界はあります。「若 者も倦(う)み、疲れ、勇士もつまず き倒れよう」(イザヤ40・30)。け れども神は、「疲れた者に力を与 え、勢いを失っている者に大きな力 を与えられる。……主に望みをおく 人は新たな力を得、鷲のように翼を 張って上る。走っても弱ることな く、歩いても疲れない」(イザヤ 40・29、31)。四旬節は、わたした ちの信仰と希望を主に置くよう呼び かけています(一ペトロ1・21参 照)。わたしたちは、復活されたイ エス・キリストを見つめること(へ ブライ12・2参照)によってのみ、 「たゆまず善を行いましょう」(ガ ラテヤ6・9)という使徒の勧めを受 け入れることができるからです。

たゆまず祈りましょう。イエスは、「気を落とさずにたえず祈らなければならない」(ルカ18・1)と教えておられます。わたしたちは祈る必要があります。神が必要だからです。自分たちだけでやっていけると考えることは、危険な思い違いです。パンデミックによって、個人と

しての、そして社会としての弱さを 実際に確認させられたのであれば、 この四旬節はわたしたちに、神への 信仰の慰めを経験させてくれます。 信仰なしには確かさを得ることはで きません(イザヤ7・9参照)。わた したちは歴史の荒波にあって皆で同 じ舟に乗っているのですから、だれ も独りでは救われません2。そして何 より、神なしに救われる人はいませ ん。イエス・キリストの過越の神秘 のみが、死の暗い霧雲に勝利するか らです。信仰があれば人生の苦悩を 免れることができるわけではありま せんが、キリストのうちに神と結ば れ、挫かれることのない大いなる希 望――それをあかしするのは、神が 聖霊を通してわたしたちの心に注い でくださった愛です――をもって苦 難をくぐり抜けることができます (ローマ5・1-5参照)。

たゆまずに、わたしたちの人生から 悪を一掃しましょう。四旬節がわた

したちに求める肉体的な断食は、罪 との闘いのためにわたしたちの霊を 強めてくれます。ゆるしと和解の秘 跡によって、たゆまずゆるしを請い ましょう。そうして、神はたゆむこ となくゆるしてくださることを知り ましょう。たゆまずに、欲望と闘い ましょう。エゴイズムやあらゆる悪 を助長する弱さは、時代ごとに異な る様相で、人を罪に陥らせてきまし た(回勅『兄弟の皆さん』166参 照)。そうした様相の一つはデジタ ルメディアに依存する危険性で、そ れは人間関係を希薄にしてしまいま す。四旬節は、こうしたわなと闘 い、代わりに、顔と顔を合わせる 「実際の出会い」(同50)による、 より完全なかたちの人間のコミュニ ケーション(同43参照)をはぐくむ にふさわしい時です。

たゆまずに、隣人への積極的な慈善 のわざによって、よい行いに励みま しょう。この四旬節の間、喜んで差

し出す施しを実践しましょう(ニコ リント9・7参照)。「種を蒔く人に 種を与え、パンを糧としてお与えに なる (ニコリント9・10)神は、 わたしたち一人ひとりを、自分の糧 を得られるようにしてくださるだけ でなく、他の人のために惜しみなく よい行いができるようにもしてくだ さいます。わたしたちの人生全体 が、よい種を蒔く時だというのが真 であるならば、この四旬節をとりわ け好機として、そばにいる人の世話 をし、人生の途上で傷ついている兄 弟姉妹の隣人になりましょう(ルカ 10・25-37参照)。四旬節は、苦し みのうちにある人を避けるのではな く探し出すにふさわしい時であり、 耳を傾けてほしい、優しいことばを かけてほしいと願っている人を無視 するのではなく招き、孤独に苦しん でいる人を見捨てるのではなく訪ね るにふさわしい時です。すべての人 に対して善を行うようにとの呼びか けを実行に移しましょう。もっとも

小さくされて寄る辺のない人、見捨てられ蔑まれている人、差別を受けて排斥されている人を愛するために、時間を割きましょう(回勅『兄弟の皆さん』193参照)。

# 3.「飽きずに励んでいれば、時が来 て、実を刈り取ることになります」

四旬節は毎年わたしたちに思い起こ させてくれます。「善は、愛、正 義、連帯と同じく、一挙に達成され るものではありません。日々勝ち取 るべきものです」(『同』11)。で すから、倦むことなく一歩一歩善を 行うことができるよう、待ち続ける 農夫の忍耐強さ(ヤコブ5・7参照) を神に願いましょう。倒れたら、必 ず助け起こしてくださる御父に手を 伸ばしてください。道に迷い、悪の 誘惑に陥ってしまったら、「豊かに ゆるしてくださる| (イザヤ55・ 7) かたに急いで立ち帰ってくださ い。この回心の時に、神の恵みと教

会での交わりに支えを得て、たゆま ずよい種を蒔きましょう。断食は地 を整え、祈りは地を潤し、愛は地を 実らせます。わたしたちは、「飽き ずに励んでいれば、時が来て、実を 刈り取ることになる」(ガラテヤ 6・9) こと、そして忍耐のたまもの によって、わたしたちと他の人の救 いのために(一テモテ4・16参照) 約束されたよいものを受けるという こと(ヘブライ10・36参照)を、信 仰において確信しています。すべて の人に対する兄弟愛の実践によっ て、わたしたちのために死んでくだ さった(ニコリント5・14-15参 照) キリストと結ばれ、神が「すべ てにおいてすべて| (一コリント 15・28) となられる天のみ国の喜び を待ち望むのです。

その胎より救い主がお生まれになられたかた、すべてを「心に納めて、思い巡ら」されたかた(ルカ2・19)、おとめマリアに願います。わ

たしたちが忍耐のたまものを授かれるよう、執り成してください。わたしたちの母として寄り添ってください。そしてこの回心の時が、永遠の救いの実りをもたらすものとなりますように。

 $\Box - \overline{\neg}$ 

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラ ノ大聖堂にて

2021年11月11日

トゥールの聖マルティノの記念日

フランシスコ

## 注

1. ^ 聖アウグスティヌス『説教』 (Sermo 243, 9,8; 270, 3)、 『詩編注解』(Enarrationes in Psalmos 110, 1)参照。

- 1. 「新型コロナウイルスの感染 拡大にあたっての特別な祈りの 式でのウルビ・エト・オルビの メッセージ」参照。
- 3. ^ 「お告げの祈り (2013年3月 17日) 」参照。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ 2022-Shijunsetsu-Kyoukou-messeeji/ (2025/11/27)